

令和 5 ・ 6 年度 高梁市社会教育委員会議報告書

魅力ある学びの場を通し、
人と人がつながるコミュニティの創造

～公民館による若者を中心とした世代間交流の充実～

（ 提言 ）

令和 7 年 3 月
高梁市社会教育委員会議

目 次

I	協議テーマについて	1
II	研究の視点	4
III	先進事例ヒアリング	4
	・高梁市立有漢公民館 「納涼ふるさと祭を盛り上げよう！」 ～長蔵音頭を引き継ごう～	
	・岡山市立御南西公民館 「みんながスマイル若者の地域参画	
IV	先進事例から見えてきたと	10
V	提 言	12
VI	報告書を作成して	14
	<参考資料>	15

I 協議テーマについて

1 協議テーマ

魅力ある学びの場を通し、人と人がつながるコミュニティの創造
～公民館による若者を中心とした世代間交流の充実～

2 テーマ設定の経緯

昨年12月に国立社会保障・人口問題研究所から、高梁市の2050年における人口推計が発表され、2020年に比べて51.7%減少するという厳しい推計結果が出された。また、平成27年から令和2年までの5年間の人口は、減少率が9.36%と高いものとなっている。

さらに、新型コロナウイルス感染症のまん延など、本市を取り巻く問題は拡大し、社会教育活動の縮小や人と人とのつながりの希薄化に拍車をかけている。

このような、人口減少による活力低下や様々な地域の課題を克服し、心豊かな生活を送ることができる地域づくりが課題であり、そのためにも豊かな学びの機会を提供することが重要である。こうした変化は社会に大きな影響を与えており、社会教育のありようは大きく変化を求められる状況にある。

【令和4年度社会教育委員会議】：メインテーマ設定

令和4年度第1回会議の中で、高梁市は「人口減少・少子高齢化」の問題（現状）がベースとしてあることから、このための課題解決を考えることが最優先であり、「地方創生につながる社会教育・公民館の役割」はどうあるべきか、社会教育委員はどのように考え、取り組むべきかを考える必要性を共有した。

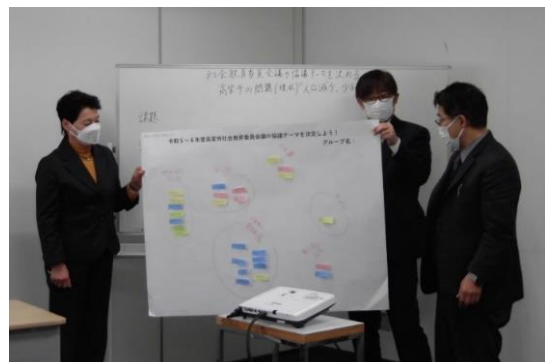
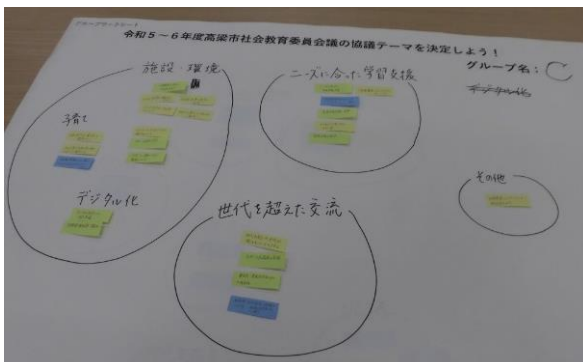
そこで、第2回は、高梁市の「人口減少・少子高齢化」の現状に対し、公民館、図書館等社会教育施設として、どういった課題を解決すべきかを考えることとなった。

＜アクティビティ①：ラベルワーク＞

グループごとに高梁市の課題を書き出し、委員全体の意見を集約・共有した。

＜委員から出た課題＞

- ・世代や地域間の交流、ニーズに合った学習支援、若者の社会参画
- ・住民の幸福度の向上、リーダーの育成、地元を知ること
- ・施設環境の整備、魅力ある学びの場（DX、子どもが参加できる活動等）など



<アクティビティ②：ランキング>

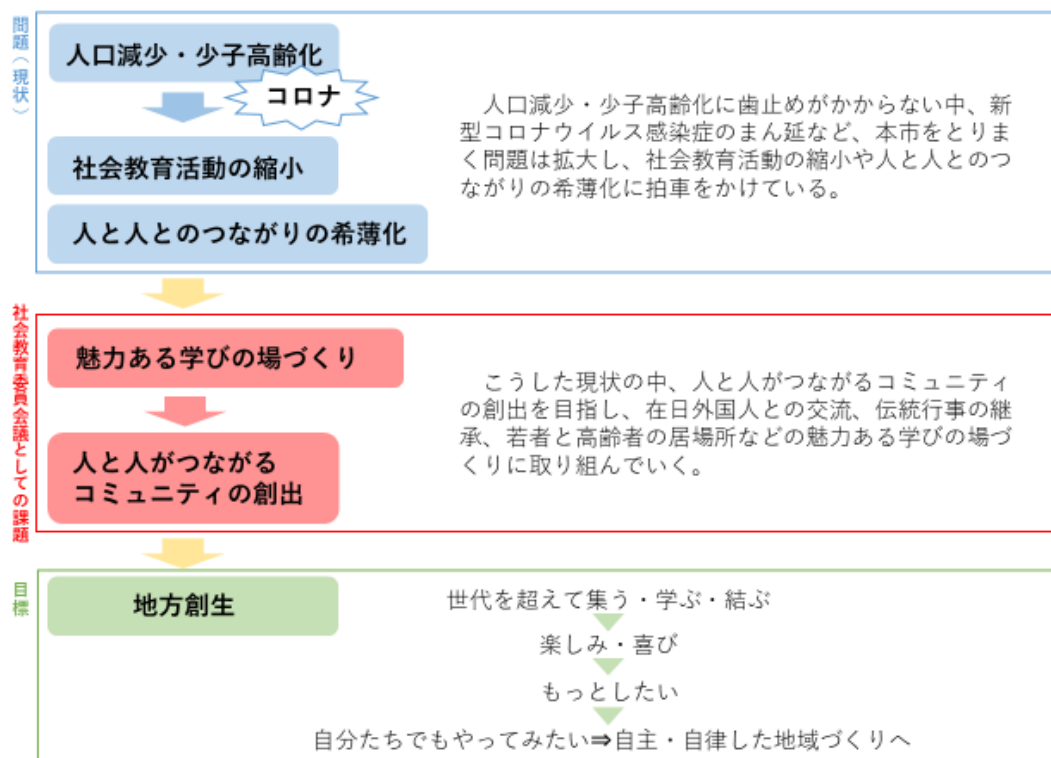
ラベルワークにおいて出された課題を7つにまとめ、解決すべき優先度の高い課題順に順位付けをした。各グループの上位の課題に対して協議をする中で、住民の幸福度を上げるのは大前提であり、住民個人の幸せと地域の幸せはつながっており、地域という場の幸福が個々の幸福を支えていくことになる。そのためには魅力ある学びの場が必要であり、若者の社会参加と、世代や地域間の交流は手段として重要なポイントとなる。

「社会参加」については、地域貢献だけでなく、公民館活動に参加することも社会参加である。若者が社会参加することで、子どもから高齢世代までの世代や地域間の交流にもつながるので、若者の社会参加と世代や地域間の交流は一体的に捉えることができる。

こうした議論から、社会教育委員会としての上位課題を「魅力ある学びの場」「若者の社会参加」「世代や地域間の交流」とし、審議のテーマを「魅力ある学びの場を通し、人と人がつながるコミュニティの創造」と決定した。

人と人がつながるコミュニティの創出をめざし、在日外国人との交流や伝統行事の継承、若者と高齢者の居場所など魅力ある学びの場づくりに取り組んでいくことで、社会教育の実践による地方創生につながるものとする。

解決すべき課題	Aグループ の順位	Bグループ の順位	Cグループ の順位	社会教育委員会 の順位
① 世代や地域間の交流	2	3	4	3
② ニーズに合った学習支援	7	5	1	5
③ 住民の幸福度を上げる	1	7	7	7
④ リーダー育成	6	4	5	6
⑤ 若者の社会参加	3	1	6	2
⑥ 施設環境の整備	5	6	2	4
⑦ 魅力ある学びの場（DX等）	4	2	3	1

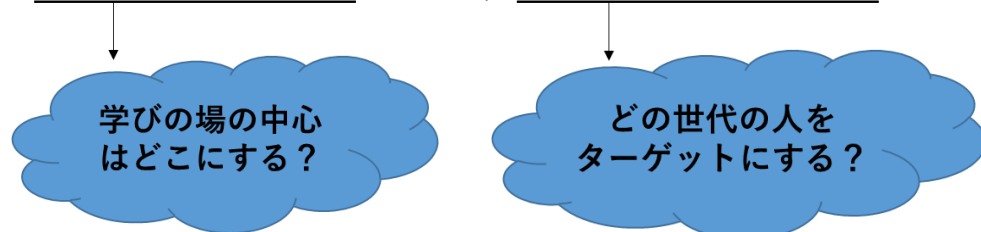


【令和5年度社会教育委員会議】：サブテーマ設定

令和4年度の社会教育委員会議で決定したテーマ「魅力ある学びの場を通し、人と人がつながるコミュニティの創造」は広範多岐にわたるため、このテーマを中長期的に活用して研究を進めることが理想である。

そこで、第1期となる令和5～6年度の2年間、学びの場や対象世代のターゲットを絞った副題を設定する必要がある、第1回会議において協議をした。

「魅力ある学びの場を通し、人と人がつながるコミュニティの創造」

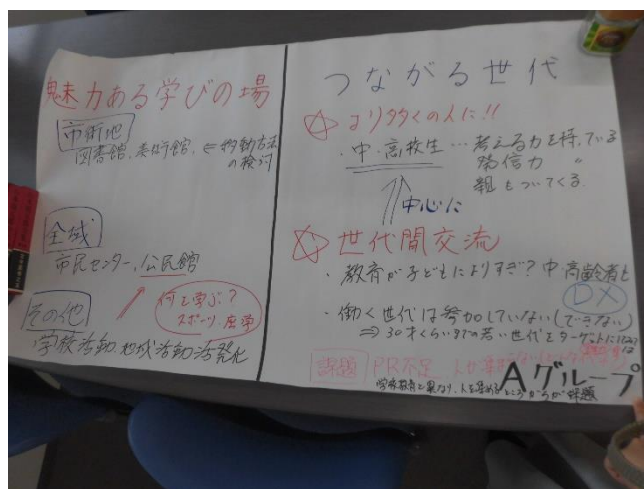


「魅力ある学びの場」は公民館、図書館、博物館などいろいろある中で、「テーマのキーとなる施設はどこか」、また人と人をつなげるためにどの世代を核にするべきなのか協議をした。

魅力ある学びの場については、図書館、美術館、公民館、その他スポーツ施設と、どの施設も重要な核となり得る。また、つながる世代については、中高生を中心とした世代間交流や30歳くらいの若い世代がターゲットとして出された。

さらに協議する中で、公民館や図書館など様々な施設が挙げたが、高梁市中心部に集中することなく、市としての課題解決をするために、この2年間は公民館に焦点をあて、世代については、意見が多く挙げた中高生を中心として、対象範囲を広げた「若者」を核として様々な世代をつなげる交流の充実を図ることとなった。

協議の結果、副題は「公民館による若者を中心とした世代間交流の充実」に決定した。



Ⅱ 研究の視点

人口の減少率が高い高梁市の現状を踏まえ、学校と社会教育の懸け橋になり得る公民館において、将来を担う中学生や高校生など若者が中心となり、同世代、異世代との交流など多くのつながりが生まれ、地域住民の学びが充実するために、公民館や教育委員会が取り組むべきことは何か、学校や地域学校協働活動推進員はどう関わり、また、どのような協力ができるのか、公民館を核に、若者が地域課題解決や地域づくりに取り組むための方策について調査研究を行うこととした。

Ⅲ 先進事例ヒアリング

高梁市立有漢公民館	「納涼ふるさと祭を盛り上げよう！」 ～長蔵音頭を引き継ごう～
【概要】 有漢町：人口 1,882 人（R6.1 現在） 高齢化率 46.8% 町内に 1 子ども園、1 小学校、1 中学校があり、令和 7 年度には、小中学校が統合し、義務教育学校「有漢学園」が開校する。	
【目的】 ・「納涼ふるさと祭」を主催者側も来場者側も老若男女みんなが楽しめる祭になるように盛り上げる。 ・途中で途絶えていた伝統芸能「長蔵音頭」を 4 年前に復活させたきり、発表の機会を失っていたため、この祭を通して再復活させ、できるだけ多くの人に知ってもらい、踊りを楽しんでもらう。	
【企画運営への中高生のかかわり】 ・ステージイベントの司会として、中学生ボランティアが関わった。 ・公民館講座「老若男女 e スポーツ体験会」や「おいしいコーヒーとお菓子講座」で、中高生が先生となり、参加者をサポート。 ・祭や公民館講座のポスターは、中学生が作成。	
【内容】 1 途絶えていた「長蔵音頭」を復活させた元地域おこし協力隊員の想いの引き継ぎ 2 長蔵音頭継承実行委員会の結成 3 長蔵音頭ワークショップ・練習会 （出前突撃講座を子ども園、小中学校、放課後子ども教室、高齢者の集い場等へ） 4 納涼ふるさと祭前夜祭 （子ども 30 名、大人 30 名が集い練習会、カレーライス会食、ゲーム等交流会） 5 祭り当日の盆踊りの輪 （地元企業も「地域貢献になれば！」と約 30 名の踊り連を組んで参加） 6 長蔵音頭継承実行委員会の総括・反省会（継承することの確認）	



◆取組を始めた経緯

Q:どのような課題意識をもっていましたか。

○公民館に勤務し始めた昨年度、どんな取組をすれば公民館活動になるのか、手探り状態。まずは住民のニーズに耳を傾けながら、可能な講座に取り組んだ。（「認知症サポーター養成講座」「剪定講座」「みんなで備えよう！防災教室」「有漢の歴史講座（教育編）」など）



Q:取組をはじめたきっかけは何ですか。

○老若男女が年齢に関係なく交流し、憩える場づくりが必要と感じた。

○有漢生涯学習センターに隣接する場所に義務教育学校「有漢学園」がR7年度に開校する。放課後の子どもたちの居場所づくり、それを支える大人の居場所づくり、元気づくりが必要であると考え始めたこと。

Q:参考となった取組事例などはありましたか。

○御南西公民館・御南中学校の取組を参考にしたい。

◆取組を継続する中で

Q:どのようにして取組を進めましたか。

○消滅しつつあった伝統芸能である「長蔵音頭」を復活させた元地域おこし協力隊員の想いを引き継ぎ再復活、継承することを、4年ぶりに開催される納涼ふるさと祭を盛り上げることに照準を当て、取組を始めた。



Q:中学生の反応はどうでしたか。

○関心を示した生徒もいたが、「長蔵音頭」継承に関わることよりも舞台イベントの司会等で一部の生徒が参加するにとどまった。

Q:地域の反応はどうでしたか。

○消えつつあったものが復活したことへの喜びで町内の発祥地域の住民を中心に盛り上がり、盆踊りへの参加者が例年以上に増えた。



ステージイベントの司会
中学生ボランティア

Q:新たな問題点や課題にはどんなものがありましたか。

○中学生は企画段階から参画しようとしていたが、会議の雰囲気から臆してしまったということを、後日先生から聞いた。参画しやすい形を工夫すべきであった。

Q:新たな問題点や課題を解決するために工夫や改善されたことは何ですか。

○今年度はできなかった。今後すべきことを成果と課題・展望のQ「今後、めざしていきたいことはどんなことですか。」>に回答。

Q:取組を通して変容してきたこと（事業に取り組んだ効果）は何ですか。

○中学生自身がやりたいと思ったことと、地域が求めていることが一致した場合は双方にとって得るもの大きい。達成感、自己有用感、幸福感など。

◆成果と課題・展望

Q：今後、めざしていきたいことはどんなことですか。

○学校のカリキュラムの中に予定されていないものは組み込みにくい。年度当初から、学校と地域双方が抱えている課題や展望について協議し、生徒がどんなことをやりたいと思っているのかを情報収集することと、地域が抱えている課題や目指していることなどを学校に出向いて、中学生に直接伝える機会をもつようにしたい。中学生は地域貢献に目を向けた探求学習を進めつつある。学校と地域との winwin の関係づくりを構築していきたい。

Q：メッセージをお願いします。

○家庭以外の地域の中で子どもの居場所をつくっていくことは、それに関わろうとする大人の居場所をつくることにもなり、健やかに成長していく子どもたちの笑顔をより多く見られることで、大人のやりがいや張り合いにつながり、人づくりが地域の活性にあると信じて進めていきます。応戦していただければ幸いです。

岡山市立御南西公民館	みんながスマイル 若者の地域参画
【概要】 御南中学校区：人口 約 32,000 人 JR 北長瀬駅があり、利便性が高い。 高層マンションの新築や戸建て宅地の開発により人口が増加。子どもの数が多いことから、若い世代が比較的に多く移住しており、転出入が多いことも特徴である。 御南中学校は、地域ボランティア活動が活発で、地域住民は中学生に期待している。	
【目的】みなんにしレクリエーションクラブ 1 若者が地域や公民館で地域のために主体的に考え実践する力を付ける。 2 単発のボランティア活動から、さらに一歩前進した、若者の継続的な地域活動の場と機会を創り出す。 3 若者が地域の子どもから大人までの人たちとの温かなふれあいを通して、コミュニケーション力をアップさせる。 4 毎年「みなんにしレクリエーションクラブ」のクラブ員を募集し、地域で活動することで、若者が地域社会の担い手となる仕組みを作る。	
【企画運営への中高生のかかわり】 ・小学生を楽しませるというミッションの達成に向け、企画から準備、当日の運営すべて自分たちで行う。 ※その他、防災、ワークショップ、環境、子育て支援等様々な場面で、ボランティアとして活動している。	
【内容】 1 オリエンテーション&企画会 オリエンテーション：活動のねらいを確認、アイスブレイク、活動の様子をイメージ 企画会：個人とグループ目標を設定し、企画（フリートーク・KJ法など）する。 2 準備 ・当日の準備や、小学生へのお土産づくり。 3 お楽しみ会 ・説明は、寸劇のような形で面白くする。 4 振り返り ・活動のねらいに立ち返る。 ・個人とグループの目標に照らし合わせて振り返る。 ・PDCAサイクルで、次の活動に向けて改善を重ねる。	

◆取組を始めた経緯

Q：どのような課題意識をもっていましたか。

以下のような複数の課題を意識していた。

○中学生のボランティア活動が盛んな御南中学校区だが、私が転勤した 2018 年頃には、大人が決めた仕事を中学生が行う活動が多かった。また、募集定員を設ける場合は、定員を超えると抽選しており、やる気があっても抽選で落とされる生徒を残念に思っていた。

○公民館講座に来た小学生を観察して集団遊びが足りていないと感じた。

○数名の祖父母から、夏休み中にゲームやユーチューブで 1 日を過ごしていると聞くことがあった。

○公民館講座に子どもを参加させる保護者の中には特定の友人とだけ仲良く活動してくれたらいいと考え、グループ分けに親の要望を主張することが数回あった。

○夏休みや休日でも小学生は習い事や塾があり、子どもらしい遊びが日常的にできなくなっていた。

○社会教育職員研修で教科書のように言われる「地域を巻き込む」「持続可能なまちづくり」に向かわせる空気に、社会教育の仕事をしている私自身が疑問を抱いたり、疲れを感じたりしている。少ない職員数で複数の事業を地域とともに進めてきた。これ以上は手一杯であった。

○さらに新しい講座や事業を立ち上げる際に、時にはこの縛りを解き放って進めていってもいいのではないか。「職員がやってみたい」という入り口から進めても良いのではないか。

○職員のモチベーションは大事である。型にはめるように、誰と協働するか、どのように継続させていくかを考えるよりも先に、すべてが整わなくてもまず具現化していかないと、結局地域を巻き込むこともできないし、持続可能なまちづくりにもつながらないと考えた。

Q：取組をはじめたきっかけは何ですか。

○岡山市立公民館基本方針に「若者の参画」が重点的に盛り込まれている。

○2018 年の夏休みに小学生対象講座「大学生と遊ぼう」を開催し、小学生の様子から「集団遊び」が必要だと感じ着想を得た。

○地域活動は、若者の能力を開花させるきっかけになり得る。その可能性を試さないともったいない。

○もっと中学生が、主体的積極的に地域貢献できるようなチャンスがあればいいなと思っていた。小学生に求められる「遊び」であれば、中学生にとっては敷居が低いと考えられる。また、小学生は可愛いので中学生も喜んで活動するのではないかと考えた。

○当時の中学校の校長先生が社会教育の価値を理解しておられ、公民館職員にも期待をかけ下さっていることが伝わった。今まで公民館の仕事をしてきた中で、初めて学



校の教員から期待された。

Q：参考となった取組事例などありましたか。

○自館で行った講座「大学生と遊ぼう」

◆取組を継続する中で

Q：どのようにして取組を進めましたか。

○中学生ファースト（特にスケジュール）

○中学生が主体（自分がドライブする感覚が大事）。

職員は「好きにしていよ」という信頼を寄せる態度で、生徒が力を出せる環境を作る。但し安全面は公民館が責任をとる。

○グループ活動が基本で、仲の良い生徒同士でグループは組ませない。

○遊びが小学生にとって楽しか楽しくないかは中学生の責任。

○準備が完全でも不完全でも当日を迎える。（自分達で何とかし、何とかなる）

○最初から地域を巻き込まない。

Q：中学生の反応はどうでしたか。（中学生の感想や振り返りから）

○自分がプレーヤーだからこそ「（やる前の）不安→（やってみた）うれしさ、楽しさ→達成感→意欲」のプロセスを体感している。

○小学生から学ぶことが多いと気づく。

例 子どもの接し方、小学生が雰囲気明るくしてくれる、小学生は意外と言うことを聞いてくれる、子ども一人一人はみんな違う など

○複眼的な視点形成（客観視、俯瞰的に活動を見直す、小学生の目線になるなど）

○自己分析をする。（工夫してどうだったか、もっとこうすればうまくいくなど）

○目標に向かってグループで協力し、メンバー一人一人が役割を果たし、臨機応変に小学生に対応する。

○思いやりとルール作りの両方から「みんなが楽しめる遊び方」を考え実行する生徒もいた。

Q：地域の反応はどうでしたか。

○小学生の保護者から喜ばれる。

○公民館の運営委員会などで報告しているが、特に何も反応はない。

○地域団体からレクリエーションクラブに来てほしいと声がかかった。

○活動場所を公民館から地域へと変えると参加者層も変わり、新たな出会いと交流が良い刺激になっている。（中学生×子育て中の父親、中学生×高齢者など）

Q：新たな問題点や課題にはどんなものがありましたか。

○コロナのため国や岡山市の動きに合わせて事業をどうにか続けたこと。

○コロナが明けた 2023 年、生徒が部活動等で忙しくなったこと等の理由で、公民館ボランティア活動も以前より、生徒が集まりにくくなっている。（コロナで後退したあらゆるものの影響が今出始めたと感じる。）



Q：新たな問題点や課題を解決するために工夫や改善されたことは何ですか。

○中学生の方が三密や消毒などに留意して活動していた。自分達の判断で、部屋のレイアウトや机イスの配置、小学生の動線、座る席などを工夫できていた。新しい生活様式の変化に対応した行動が見られた。

○2020 年からは三密にならない遊びを中学生に計画してもらった。（巨大すごろく、メッセージカードづくり、新聞ダンス、だるまさんがころんだなど、他人との接触が少ない遊び）

○コロナで地域行事が中止となる中、中学生の発案で、小学生に夏祭りの気分を味わってもらおうと、祭をテーマに射的、折紙の金魚すくい（魚釣り）などをした。小学生の気持ちに寄り添って遊びを考える感性が素晴らしいと思った。

○コロナが明けた 2023 年度からは、地域や公民館ボランティア等でも生徒応募が少なくなってきた。（様々な要因が推測される。）そこで、レクリエーションクラブも再募集をかけたり、集まる回数を減らしたり、単発の活動にせざるを得なくなった。

Q：取組を通して変容してきたこと（事業に取り組んだ効果）は何ですか。

○一人一人の生徒は違っていても「御南中学生らしさ」が形作られている。

○レクリエーションクラブのやり方で主体を変えると、活動内容が広がり充実・発展する。（高校生、教育学部の大学生や大学院生、中学校吹奏楽部有志）

○岡山市の他の公民館でも参考にされて実践されている。

○小学生として参加していた児童が、レクリエーションクラブに入る。

◆成果と課題・展望

Q：今後、めざしていきたいことはどんなことですか。

○レクリエーションクラブの「遊ぼう会」は、次年度も地域の行事に組み入れられ、地域から期待されていることがわかった。また、レクリエーションクラブを複数回経験した生徒が核となり、活動を引っ張る存在になっている。

○5年目を迎え、当初小学生として参加した児童が中学生になり、活動に参加している。このまま継続していきたいが、毎年、公民館・地域・学校の実情に合わせて形態を変えながら更新していきそうである。

○レクリエーションクラブに限らず、地域活動意義を教員や保護者に理解してもらいたいと思う。地域活動は、部活や習い事と同じ棚には並ばない、次元が違うことだと思う。生徒が選ぶとか、生徒から選ばれるというレベルのことではなく、人が集団として生きていく上で、社会を支える成熟した大人になっていくために、必ず必要だということをわかってもらいたいと思っている。

○現状では、教員や保護者の受け止めは、地域活動は「オプション」という認識が殆どであると思う。教員からも「やる気がある生徒が行くもの」と言われた。しかし、生徒の様子や感想から、短時間であってもお金では買えない、地域活動でしか得られない経験をすることができていることがわかる。とはいえ、職員が重たいことを言っても遠ざけられるので、今後も、様々なボランティアの入り口を用意して中学生が楽しく活動し、地域住民から感謝される経験を積めるようにしていきたい。

○社会教育と学校教育に、橋をかけたい。学校の教員に、若者が公民館や地域で活動

する意義を伝える機会がない。子ども達から教えてもらったこと、私しか知り得ないが、教員にとっても有用だと思ふことがある。私の経験で終わらせるのがもったいない。教員に、もっと社会教育の世界を知ってもらえれば、子どもや地域の見方が変わり、教員もさらにスマイルが増えるのではないかと考える。

○現職の教員には社会教育や公民館を知ってもらえる機会はないが、社会教育実習生や教育学部の学生には、伝える機会を持てるようになってきた。将来教員になって、学校教育の現場で行き詰まることがあっても、社会教育の視点や手法を体験していれば、自身を助ける強みになると信じている。

Q：メッセージをお願いします。

○「遊び」は、すべての人にとって一番良いと思います。誰でもできるし、誰とでもできるし、人と人との距離を縮め、想像力・創造力が沸き起こります。他にもいろいろな実践をしましたのでいつかお話出来ればうれしいです。呼んでくださって貴重な機会をありがとうございます。

IV 先進事例から見えてきたこと

国の「第4期教育振興基本計画¹」では、目標として「地域コミュニティの基盤を支える社会教育の推進」が掲げられており、基本的な施策として、公民館等における地域のコミュニティ拠点の強化を図る観点から、公民館等を子供の居場所として活用することや、公民館等での住民相互の学び合い・交流の促進などが挙げられている。

本事例研究を通して、公民館を中心に、若者が主体となり地域の中で活躍することは、若者にとっても地域にとっても得るものが多く、地域の中に新たな出会いと、様々な世代の交流を生み、若者の成長と地域の活性化につながることもわかった。

岡山市立御南西公民館の実践にあるように、企画段階から運営まですべて自分たちでやり遂げることにより、自分がプレーヤーであるからこそ「(事前の)不安→(事後の)うれしさ、楽しさ→達成感→意欲」のプロセスを体感し、自己有用感やコミュニケーション力など非認知能力の育成や、住民のウェルビーイング²の実現につながるであろう。

若者が地域活動に参画することは、本来潜在的にもっている力が開花する引き金にもなり得る経験であり、自分の強みと可能性に気づくことにつながるということである。

調査した先進事例から、若者を公民館活動や地域活動に関わらせるための配慮や工夫がわかった。

1 「第4期教育振興基本計画」(令和5年6月16日 閣議決定)

2 ウェルビーイング(Well-being)とは、身体的・精神的・社会的に良い状態にあることをいい、短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義など将来にわたる持続的な幸福を含むものである。また、個人のみならず、個人を取り巻く場や地域、社会が持続的に良い状態であることを含む包括的な概念である。(令和5年6月16日 第4期教育振興基本計画)

【若者を公民館活動や地域活動に関わらせるための配慮や工夫】

- 公民館と学校、教育委員会が情報共有する。
- 公民館が、学校と地域、人と人、人と団体等つなぐ懸け橋「まちのコーディネーター」となる。
- 中学生は、企画段階から取り組みたいと思っている。会議の雰囲気など、「楽しい、もっとこうしたい」と思えるような参画しやすい形を工夫する。
- まずは、単発のボランティア活動から始めることも良い。(参加→参画→継続)
- 若者が企画段階から運営まで取り組むためには！
 - ・「やってみたい」と思えるようなチラシで募集する。学校とは、しっかり共有し、生徒に地域活動に参画する価値を伝えていただく。
 - ・大人が決めたテーマ、内容などお膳立てをしない、親切にしすぎない。
 - 成長のチャンスを奪わない。
 - ・若者に任せる。(安心安全は公民館の責任)
 - ・職員はニコニコ観察して楽しむ。
 - ・企画段階において、活動のねらいを確認し、個人とグループの目標を設定させ、振り返りも活動のねらいに立ち返り、個人とグループの目標に照らし合わせて行う。
- さらなるステップアップへ向け！
 - ・公民館の外へ出て、地域に活動場所を変える。例えば、地域で活動されている行事や活動に乗せていただき、地域と一緒に盛り上げる。
 - 親子や高齢者の方など参加者や参加者数が増え、自然な形で多世代交流が生まれる。
- 中学生が小学生を楽しませるために、「遊び」を企画させる。
 - ・中学生が授業で学んだことを小学生に、大学生から教えてもらったゲームを小学生に体験させるなど学びをつなぐ行動につながる。
 - 参加した小学生は、「中学生になったら、自分もやりたい」と学びの循環につながる。

V 提言

公民館が、若者と地域をつなぐ「まちのコーディネーター」としての機能を生かし、若者の「居場所と出番づくり」を推進していくために、それぞれの関係者に向けて取組の一方策を提言する。

【全体としての課題】

公民館と教育委員会、学校において、互いの情報提供・情報共有がまだまだ足りていないので、意思疎通をもっと進めるようにすることが必要である。

また、住民は、やりたいことや学びたいことなど感じており、様々な意見も出ているが、それを集約したり、方向づけをして活動につなげたりするリーダーがいない。

学校と公民館、地域学校協働活動推進員が地域全体でどんな子どもが育って欲しいか共有の目標を掲げる必要がある。

1 公民館関係者へ向けて

○中高生等若者に対して、興味・関心の高い講座等企画したり、地域行事のボランティアとして受け入れたりするなど参加を募る。また、オセロや将棋など気軽に遊んだり、勉強したりできる環境を整え、公民館が身近な存在となるように工夫をする。

○まずは、単発のボランティア活動から始めることも良い。(参加→参画→継続)

○学校としっかり情報共有して、チラシ等を配付し若者(例 中学生ボランティア)を募り、企画段階から運営までを自分たちで実行させる。

<ポイント>

- ・若者に任せる。口出しをしない、親切にしすぎない。(成長のチャンスを奪わない)

- ・失敗してもOKという雰囲気づくりをする。

- ・企画段階において、活動のねらいを確認し、個人とグループの目標を設定させる。

- ・振り返りをする。(活動のねらいに立ち返り、個人とグループの目標に照らし合わせて振り返る。)

- ・安心安全は、公民館が責任をもつ。職員はニコニコ観察して楽しむ。

- ・中学生が小学生に「遊び」で楽しませる活動は効果的である。

- ・会議の雰囲気など、「楽しい、もっとこうしたい」と思えるような参画しやすい形を工夫する。

○公民館の外へ出て、地域に活動場所を変えることで、親子や高齢者の方など参加者や参加者数が増え、自然な形で多世代交流が生まれる。

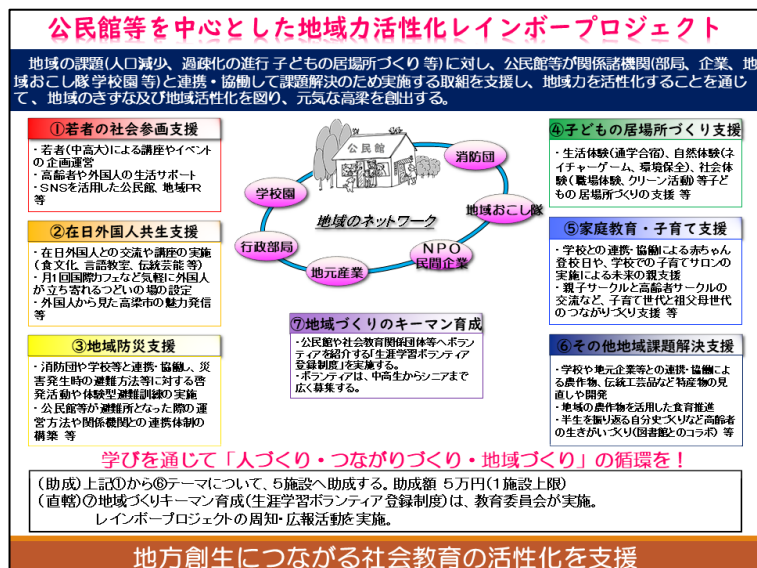
○教育委員会が実施する「生涯学習ボランティア登録制度」を活用し、中学生の頃から公民館等の活動や企画に関わらせることにより、自己有用感や地域の担い手意識が高まり次世代のリーダー育成につなげる。

○公民館が、学校と地域を、若者と地域をつなぐ「まちのコーディネーター」として活

動する。

○公民館連絡協議会で、各公民館の取組や課題、先進事例の共有を行ったり、国や県の研修会等へ積極的に参加をして研鑽を積んだりする。

○教育委員会が提供する「わたしあうまち高梁市 出前講座」や公民館等を中心とした地域力活性化レインボープロジェクト事業を活用し、魅力ある活動につなげる。



2 行政へ向けて

○実際に公民館活動の様子を観たり、公民館訪問をしたりして実態把握をし、次の実践に生かせるようにする。

○中・高校生への地域活動情報提供を目的として「RUN LEARN (ランラン) たかはし」を実施し、公民館等活動の充実と、リーダー育成につなげる。

○「公民館等を中心とした地域力活性化レインボープロジェクト事業の活用を公民館に促し、地域力の活性化を図る。

○「わたしあうまち高梁市 出前講座」の充実を図り、全公民館の活性化につなげる。

○公民館連絡協議会の運営調整を行い、他地域や他校の好事例等情報提供したり、気軽に相談したり共有したりできる場の設定をする。

○地域連携担当教職員と地域学校協働活動推進員の合同研修会と、公民館連絡協議会の研修を兼ねて、若者の社会参画の推進を図る。



地域連携担当教職員・
公民館長・推進員で意見交換

3 学校関係者へ向けて

○生活科や総合的な学習等において、社会に開かれた教育課程の実現に向け、社会と連携・協働した教育活動の充実を図り、児童生徒や教職員の視野が学校外(地域社会)へ広がるよう積極的に取り組む。

○参観日やオープンスクール等学習の報告会があれば、公民館に情報提供したり、互いの活動を共有したりする場の設定をするなど工夫をする。

○地域連携担当教職員と地域学校協働活動推進員の合同研修会に積極的に参加し、地域との連携・協働に関する研鑽を積み、また推進員や公民館長との関係性を深める。

○教育委員会が実施する「RUN LEARN（ランラン）たかはし」を児童・生徒に積極的に勧める。興味があることやチャレンジしてみたいことを生徒自身が選んで、取り組むことが出来るようしっかりとした周知を行う。

○校園長等で、地域における生徒の地域貢献活動等の推進に対する管理職の理解を図る。

○生徒の意見を抽出し、地域へ提供する。



4 地域学校協働活動推進員へ向けて

○さまざまな活動について得意とする地域人材について公民館等と連携しながら発掘する。人材発掘に関しては各地域の公民館等と協力し、公民館講座や地域でのイベントで活躍する地域人材を見つける。

○学校運営協議会等の時間を活用して学校と協議を行い、学校のニーズや活動の目的を把握する。

○学校や地域のモノ・コト・ヒトにアンテナを張り、関心を持つことを意識する。

○具体的な活動として、各地域の教材や題材を活用して、児童・生徒と地域住民を繋げることを心がける。

VI 報告書を作成して

1 研究に取り組んでみた感想

○研究テーマである「公民館による」が少し限定すぎたため、「まちづくり」も含めたらより広がるのではないかと。

○協議テーマや副題の中での若者の定義が中学生～大学生と幅広く、研究が難しかった。

○働いている若者を取り込む方法が課題。

○市内には交流のための場所が常にあるので、活用したい。

○中高生等の若者に公民館へ足を向けさせるための方法を考えていく必要がある。

2 社会教育委員として、また各所属や立場で具体的にどんな活動をしていくか

○報告書を学校に広報活動に行く。

○校内で公民館に若者が足を何けるように、学校での広報活動を行う。

○学校の授業を通して地域のために行うたのしさを経験させる。

○多くの大人と顔見知りになるような事業を企画する。また大人にも生徒を知ってもらう機会を設ける。

○生徒のやりたいことに対して大人をつなぐ。

参考資料

1 令和5～6年度 高梁市社会教育委員名簿

氏 名	役 職	選出区分	備 考
山 本 豊	高梁市小学校長会代表	学校教育関係者	
小 野 雅 子	高梁市中学校長会代表	学校教育関係者	
三 村 秀 樹	高梁中央公民館長	社会教育関係者	議長
田 村 順 子	高梁市婦人協議会長	社会教育関係者	副議長
西 口 裕 之	高梁市PTA連合会監査	社会教育関係者	R5で退任
矢動丸 祐 子	前地域おこし協力隊	社会教育関係者	R6から委嘱
西 垣 陽 平	地域おこし協力隊	社会教育関係者	
熊 谷 慎之輔	岡山大学大学院教授	学識経験者	
杉 田 守 二	一般社団法人高梁市スポーツ協会理事	学識経験者	
上 森 智 子	高梁市図書館長	学識経験者	

2 審議の経過

令和4年度 第2回 (2月20日)	○令和5～6年度の審議テーマについて
令和5年度 第1回 (6月28日)	○令和4年度社会教育事業報告 ○令和5年度社会教育主要事業について ○審議テーマ（副題）について
令和5年度 第2回 (2月19日)	○「公民館による若者を中心とした世代間交流の充実」を目指すための先進地ヒアリング（2事例） ○令和5・6年度高梁市社会教育委員会議の提言作成に向けて公民館、教育委員会、学校ができること
令和6年度 第1回 (10月15日)	○令和5年度社会教育事業報告 ○令和6年度社会教育主要事業について ○研究のまとめと提言骨子（案）について
令和6年度 第2回 (2月26日)	○令和7年度 社会教育主要事業について ○提言最終案について ○令和7～8年度の審議テーマについて
令和7年3月	提言の提出

高梁市社会教育委員会議

「魅力ある学びの場を通し、人と人がつながるコミュニティの創造」
～公民館による若者を中心とした世代間交流の充実～
(提言)

発 行 : 令和 7 年 3 月

事務局 : 高梁市教育委員会社会教育課

〒716-8501 高梁市松原通 2043

電話 0866-21-1514

<https://www.city.takahashi.lg.jp/life/1/15/53/>